

当院の内視鏡センターにおける臨床検査技師の役割

(内視鏡スコープの洗浄履歴管理・培養検査を中心に)

◎大西 葉月¹⁾、井垣 歩²⁾、鳥居 良貴²⁾、山田 久美子²⁾、前田 真紀子²⁾、高見 その子²⁾、刑部 陽香²⁾、船越 千恵美²⁾
兵庫医科大学¹⁾、兵庫医科大学病院²⁾

【背景】平成27年7月より、臨床検査技師3名が内視鏡センターの業務を開始し、現在5名が従事している。当院の内視鏡センターは消化管内科、肝胆膵内科、炎症性腸疾患内科・外科、呼吸器内科・外科等の関連科の医師と、看護師、臨床工学技士および臨床検査技師によって運営されている。上部および下部消化管内視鏡検査を中心に、ESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)、ポリペクトミー・EMR(内視鏡的粘膜切除術)、ERCP(内視鏡的逆行性胆管膵管造影)、止血処置、小腸ダブルバルーン、気管支鏡等の検査が年間約14900件施行されている。今回、当院の内視鏡センターにおいて臨床検査技師が中心となって行っている内視鏡スコープの洗浄履歴管理および培養検査についての取り組みを報告する。【業務内容】洗浄履歴管理とは、いつ、どこで、誰に、どのスコープを使用したかをすべて記録し、必ず洗浄・消毒を実施していることを証明するために行っている。使用後の内視鏡スコープは日本消化器内視鏡技師会「内視鏡の洗浄・消毒に関するガイドライン(第2版)」に準じて、①ベッドサイド洗浄、②一次洗浄(用手法による洗浄)、

③二次洗浄(洗浄機洗浄)の工程を経て次の検査に使用される。培養検査とは、「内視鏡定期培養検査プロトコール」に準じて、スコープの安全性を保証するために行っている。当院では微生物検査室の協力の下、年3回、スコープの培養検査を実施している。全機種の中からそれぞれ無作為にスコープを抽出し、現在まで計10回(スコープ計55本)の培養検査を実施し、その全てにおいて一般細菌・抗酸菌ともに陰性であった。【今後の展望】多職種が勤める内視鏡センターでは、チーム医療の一員であることを自覚し、検査介助だけでなく内視鏡スコープにおける洗浄・消毒の知識をさらに深めていく必要がある。培養結果から、現時点で当院の内視鏡スコープは洗浄・消毒が確実に実施されており、安全性が保証されていることが分かった。しかし、この結果に慢心せず、臨床検査技師が専門的な知識を活かし、中心となって、今後も洗浄履歴管理と定期的な培養検査を継続していく必要があると考える。また、万が一、今後の培養検査で陽性が確認された場合の対応および対策を構築しておく必要があると考える。